

CASE 1

京都大学 × IHI



河野泰之

京都大学 副学長（国際戦略担当）
東南アジア地域研究研究所 教授／農学博士

— 先生にはデザイン思考の第1ステップであるフィールドワークを体現されている方としてインタビューさせていただきたいと思います。まず先生は大学では農業土木を専攻されていましたが、なぜ東南アジアを対象に研究されるようになったのでしょうか。

河野 1980年代初頭に学部生で、当時、農業土木は1学年20人でした。僕は大阪の都市部の出身で実家は農家でもなかったんですが、その20人のなかに会津の農家出身が2人いたんです。すごく頭が良くて真面目で、日本の農業に対する愛のある2人でした。

日本の農業はこの2人に任せようと思って、海外のことをやりたいと先生に言いました。ただ当時は先生でさえ、海外に調査に行く機会が年に1回あるかないか。ましてや学生が調査に行く機会なんてほとんどなかったんです。それでも修士の時は、インドネシアのジャワ島で海外事業を実施している企業を紹介してもらい、1か月現地に行かせていただいて調査し論文を書きました。

そして博士課程に入る時に、この研究所（当時は東南アジア研究センター）の先生に海外で調査する機会がないか聞きに来たら、たまたまタイのプロジェクトが始まったところだったんです。次はそれに行かせていただきました。

— 現在、先生は人間の生活と自然との調和ということに注目されていますが、当時は何をみてこようと思っていらしたんですか。

河野 僕は農業技術の研究をしているわけですから、農業生産を増やすとか、災害に強い農業にするとか、基本的にはそういう視点で見えていました。だから博士論文の仕事も、コメの生産をいかに安定させるか、いかに増やすか、そのためにどう技術的な解があるかがトピックでした。博士論文をまとめたのが1986年。

しかしその後、農業は、環境保全との関係で悪者扱いされるようになります。

農業の過剰な施与や、農地拡大のための森林伐採が問題視されました。確かにそういう面もあるなと思い始めて、じゃあどこで農業生産と環境保全が一番シリアスにぶつかっているのかを考えま

した。それは平地ではない。平地は何十年何百年と水田をやっているんで、農業生産と環境保全のバランスがすでに確立されているんですよ。

だけど山地に行くと、例えば焼畑農業など、日々農業生産と環境保全政策がぶつかっているような場があった。それで90年代半ばぐらいから東南アジア大陸山地部での調査を始めました。そこには環境調和的な農業も環境破壊的な農業もあって、農業生産と環境保全の関係にもいろいろなものがあるんだな、というのが見えてきました。

— 何度も足を運ばれて、単に調査するのではなくて、コミュニティの中に入るということをされていますが、そのきっかけは。

河野 最初のタイの村の調査がそういうデザインになっていたんです。チームでやる調査で、日本人の研究者が12～13人は村に住み込んでいました。僕は主に水田農業の調査をしていましたけれど、ある人はいろんな世帯を回って家計調査をしたり、ある人は宗教の調査をしたり。そういうふうに関わり分担して、後で全てデータを合わせるというデザインだったんです。

その時はまだ深いことを考えていないから、論文を書けて良かったぐらいのことだったんですが、その村の変化を10年、20年と見て、いったい何でこういうふうに変化してくるのかを考えるようになると、村のいろいろな側面のデータをもっていることが大きな強みになりました。

私が調査したのはちょうどタイで高度経済成長が始まるころで、私は、生産性があまりに低いので、この村の農民はいずれ農業をやめると思ったんです。でも20年たっても続いていて、かつ農家がけっこう農業に投資をしていて、農家数自体も増えている。なんでやねん、と。農業の経済性だけでは説明できません。そうすると、それぞれの世帯でお父さんお母さんは何をしてるのだろう、おじいちゃんおばあちゃん、あるいは子育てはどうなんだろうと、いままで焦点を当ててなかったようなことが見えないと農民の考えが分からないわけです。

そういうのをずっとやっているうちに、なるほどこの農村は高度経済成長のなかでこういうふうに変遷してきたんだなという、全体像が徐々に見えてきました。

— そういう村の生き方みたいなものなかには「経験知」がある、ということを先生は寄稿文（IHI 技報 Vol.59 No.3に掲載）に書かれていました。例えばどういうものでしょうか。

河野 例えば肥料のやり方。日本の場合は植える前に施肥し、ある程度成長したらまたやると決まっています。でも、この村の人は稲の成長を見ながら、ここはちょっと生育が悪いと思ったらそこにちょっとやる。マニュアルがないんです。結果として、肥料の総量は少ないんですが、それなりの効果を発揮している。一番効果的なところにちょっとやるというのは、一つの経験知だと思うんです。

それから生き方でいったら、30、40代の時はだいたい町に働きに行くんですが、子どもが生まれたら田舎にいるじいちゃんばあちゃんに預ける。町では子育てしないんです。日本だったら怒られそうですが。

— 育児放棄だなんて言われますよね。

河野 その感覚がほとんどない。そうなってくると、家族のあり方も変わってきますよね。親子3代で、真ん中が外に行ってお金を稼いで、上と下で田舎を守るみたいな。3代そろっていないとか、じいちゃんばあちゃんの体調が悪いとかなら、兄弟が一緒に住み始めたり、いとも入ってみたり。その場その場の状況で家族の形やそれぞれの役割を変えながら、みんなやっていく。

そういう判断や工夫ややり方の積み重ねが経験知です。経験知は、農業の現場から生活のあり方まで含めて、実践的には非常に強いという印象もっています。

— それは農業を営むのに有利な環境ではないために生まれた、生活の知恵みたいなことでしょうか。

河野 それもあるかもしれませんが、誰も守ってくれないからです。日本の農業とか農家って、政府もあって農協のような組織もあって制度もあって、いろんな形でみんなに守ってもらえる可能性があるじゃないですか。でもタイは何もない。つい最近まで国民の多くがコメ作り農家だったんで、そういう人を守ろうと思ったらすごく

お金がいる。でも政府はそんなお金もっていない。農民、農業というのは保護する対象ではなかったんですね。特にコメ作りは。

— 農民同士で守るような、自然発生的なものはないんですか。

河野 昔は2、3年不作が続くと、ほんとに食べるものがなくなつたんですよ。村の仲間同士で助け合ったらいいといっても、ある家族が不作のときは隣の家族も不作。だから助け合えることがそんなにないんですよ。

お上が何とかしてくれるなんてまったく考えていない。だからその分、自分たちで生きていかないといけないという意識がすごく強い。

— そうすることが現地に行くに肌感覚で分かるんですね。

河野 それは、ちょっと行っただけでは分からない。例えば土壌を調べてイネの成長を調べてと、決まっていることだけさっと調べて帰ってというのが普通の調査ですけど、それだけやっていたら分からないですよ。

— まさに、そこをお聞きしたいです。一緒に生活していれば誰でも感じるのか、何を見るとそういうことにピンとくるのか。ものの見方のポイントといいますか、そこにフィールドワークの粋みたいなものがあるのかなと。

河野 やっぱり、「この人は何を考えているんやろう」とか、一生懸命考えますね。言葉にはしていないけど、みんな、いろいろ背負って生きてはるわけじゃないですか。

— それは想像されるわけですか。

河野 そうですね。すごく想像します。

— 自分なりの答えを用意してその人たちを見ていると、答え合わせのようにだんだん分かっていく。思ってもみないことも出てくるんですか。

河野 それもあります。時々すごくいい人がいるんですよ。僕はお金持ちになりたいとか、有名になりたいとか、快楽を得たいとか、そういうタイプの人間なんです（笑）

— いえいえ、みんなそうです（笑）

河野 相手もきつとそういう人に違いないと思って、いろいろ考えるわけですよ。だけどなかにはそんな邪念を一切もたない人がいらっしやる。そういう人に出会うと、僕の推論が破たんするんですよ。おかしい、こんなわけがないと。

— 本当にそうなのか疑ったりしませんか？

河野 だからいろいろ試してみるわけですよ。こんなことを言ってるけど、きつと何か裏があるに違いないとか。いろいろ考えて、どこからボールを投げても崩せなくて、そうか、この人は本当にそういう人やったんかと。ああすいませんでした、という気持ちになりますね（笑）

— それを感じ取る力をどう付けていこうか知りたいです。

河野 僕はいま60歳で、25歳ぐらいからフィールドワークをやってもう35年。年間100日やっても3500日ぐらいのなかで、1万人まではいかなくても5000人以上と話をしていると思います。いろんな人と出会って、この人はこういうふうにして生きてきたんだという事例を積み重ねていくと、新しい人と出会ったときも、理解するスピードは速くなってきましたよね。

でも、一番大切なのは、まあ、好きかどうかでしょう（笑）研究者って、基本的に好きでやっているんです。だからフィールドワークすることはまったく苦痛ではないというか、むしろ喜び勇んで行っていますよ。いろんな人と話をするのが好きだから。そこが出発点じゃないでしょうか。

— 好きが始まり、分かります。いままでたくさんの人間活動を見聞きされてきて、これから自然環境とどう付き合っていくと東南アジアが良くなっていくと思われていますか。

河野 例えばタイで1ヘクタール当たり2トンしか取れない作物を3トン4トンと取れるようにするために、日本の技術をタイに持ち込んで少し調整して使いましょと、これまでは基本的にそういう発想でずっとやってきたんです。僕は、これはあかんと思います。

東南アジアって熱帯にあって、生物活性が高いのでいろんな生き物があるんですよ。動物や植物だけじゃなくて、土の中の微生物とかそういうのも含めて。それに比べると日本の自然環境はシンプルです。シンプルな環境でつくり上げた技術を複雑な環境にもっていても、うまくいかないんです。殺虫剤や除草剤をどんどん使えば病虫害や雑草は一時抑制できますが、そうすると自然も反発して、結果としてもっとたくさん施さなければならなくなる。それをやっていたらいずれ破たんするんです。

そうではなくて、東南アジアでずっとやってきた農業というのがあるわけですよ。殺虫剤とか使わなくてもできるようなものが。それを出発点にちょっとずつ改善していくような道を考えないと。

— まさに先生が調査された村で行われていたことですよ。

河野 あの村の場合は政府からも研究者からもほったらかしにされていたので、誰も介入しなかったのが良かった。そうすると自分らで考えないといけないので、小さい改善を積み重ねていって、地道にだけど、だんだん良くなってきているんです。やっぱり自律、自分で律するというのが基本だと思います。それを外部から「ちょっとだけ」サポートしてあげるのが大事。

同じように自分たちで地道にやっているところはあるんだけど、そういうところは地味なんで光が当たらないんですよ。でも、僕らみたいな研究をしている者がしっかり光を当てて、そういう形の農業の発展をちゃんと評価して、世の中に出してあげないといけないと思っています。

いい方法って一つじゃないんですよ。普通はこれがベストなやり



方であって、それに対してここは90%できている、80%できているという見方をしちゃうんだけど、そうじゃなくて、この家族なら、この土地条件なら、これがいいよねと。この人らにとっては、こういう理由があるからこれが一番いいんだというのを見極めるのは、フィールドワークをしないとできないかなと思います。

— そういう部分で、企業にとってもフィールドワーク的な手法で個々のお客さまのニーズや問題をお聞きすることが重要だと思います。どういうところがポイントになるのでしょうか。

河野 ある部署ですごく成功したマネジメントのやり方があるとしないですか。だけど同じやり方を隣の部署や違う会社にもっていったって、成功するかどうか分からない。それは、それぞれの部署もっている制約状況が違うからなんですよ。

だから、パフォーマンスを見るだけじゃなくて、どういう制約条件の下で成り立っているのかとか、どんなリソースがあって成り立っているのかとか、その背後にある条件を特定して、パフォーマンスを相対的に見られるかどうかということだと思わなきゃダメ。対象を相対化するような視点という視座を確立する必要がある。

— それは逆に言えば、制約条件を無視して結果だけで語られることが多いと。

河野 そう思いますね。そんなことないですか？

— とても耳の痛い話です（笑） そうすると、その部署だからうまくいったんだ、うちとはこれが違うから無理だという話で終わってしまいます。本当に前例は使いこなせないものなのか、フィールドワーク的な手法で分析する必要があると思っていて、先生のお話を参考にさせていただこうと思います。

河野 それは素晴らしいことだと思いますけれど、やっぱり経験しないと分からないことってたくさんありますよ。

— 飛び込んでいくのが一番ですよ。先ほど先生が、「好きかどうか」という非常にシンプルな答えを示してくださいました。

河野 そう。やっぱり好きだと努力しますよ。好きな人が飛び込んで、その人の話を聞いたら、好きでも嫌いでもなかった人が好きになるかもしれない。そういう連鎖を大切にしたい方がいい。大切にできる社会にしていけないといけないですよ。

— ありがとうございます。